

桜と日本人の心性

高木 きよ子

桜についてなにかまとめてみようと思い立ってからすでに随分の年月がたった。にもかかわらず未だにまとまったものにならずじまいである。怠け者の一語につきるが、ただ怠けていただけではない。「桜」の進行過程に他のものが入りこんでしまったりして遅々として進まないのが現状である。例えば西行の研究、これにもかなりの時間をついやしてしまったが、もとは桜に端を発している。桜の歌を集めていく道程で西行にとらわれ、ついそちらが先になってしまった。その他やりたいことがいろいろあって、なかなか桜に集中できないでいる。「桜」は一体いつ出来上がるのだろうか。他人さまにきくわけにはいかないから自分で解答を出すより他ない。このエッセイも桜の研究を宣言することで我と我が身をしばるための企てであるといえる。

もう十数年も前のことであつたと思うが、ある陶芸家の展覧会で桜の模様の抹茶茶碗にひどく打たれた。落ち着いた淡い色彩をベースに桜の一枝がはかなき様に描かれ、うっとりとするような美の世界を醸し出していた。そればかりでなくそこに漂う何か神秘的な気魄、そしてそこはかたない情緒、それらが交じり会った不思議な雰囲気は私の心を振るいたたせた。心の奥にねむっていた桜への思いが一気に噴き出し、桜について何かまとめなくてはと私を駆り立てた。さっそく手初めに万葉集・古今集・新古今集それに西行を加えて桜の歌百首を集めて解説をつけた「桜百首」を出版した。1979年のことであるから既に13年の昔である。この本は短歌の解説書の体裁をとり、研究とはいえない。これを踏み台にしてもっときちんとした研究をするための手がかりとしたのである。

この本を作って気がついたことの一つは万葉集に桜の歌が四十首余りもあることであつた。万葉集に代表される花といえはまず梅で、桜は平安時代の美を象徴するものと考えていた漠然とした知識が見事にやぶられ（といっても上述のことが否

定されたわけではない）桜は古くから日本人の心をとらえていたのだということを見出したわけである。桜は日本に自生し、春になると淡紅の花を咲かせ野山を彩り人々にその美しさを見せていたのである。

日本人の桜に対する心の原典はここにある。そこには華麗な王朝時代や絢爛豪華な桃山文化そして庶民に浸透した江戸の花見に見られるようなぱっとした美しさというより、めだたない慎ましさを感じられる。古代末から中世にかけての無常意識を桜のはかなさに感じる以前のおおらかで、そして自然と渾然一体になった古代人の姿が見える。

しかし、桜が脚光をあびるのはやはり平安時代になってからである。王朝の貴族たちは花の宴を催し桜狩りに出向いて桜の美しさに酔い痴れた。そしてそれらを歌に詠んで楽しんでいたのである。何時の頃からか「花」といえば桜をさすようになり新古今時代にはそれが定着した。古来の歌に詠まれている花は桜にかぎらないのに多くの花の中から桜を「花」と呼ぶことにしたのは、一つには、桜がごくありふれた一般向きの花であったからである。しかし一方で、やはり桜が他の花を圧倒する魅力をもっていたからであろう。それは単に魅力というよりもっとなにかあるもの、いわば日常性を越えた不思議な力でもいえるようなものではないかと思う。

桜は日本人にとってはごくありふれた花でありながら特殊な花なのである。ありふれた花であるからこそ人は安心してこの花のもとに身をよせる。そして、特別な花として、日本人はこの花にある価値を見出している。それは長い歴史を通して、さまざまな形でとらえられてきている。もっとも端的に桜を表現しているのは和歌である。桜に寄せる日本人の心を見るには一番でっぴり早い資料になる。藤原良経の「昔誰れかかる桜の種植えて吉野を花の山となしけむ」には素朴ながら皆が感じる心が詠まれているし、「山室にちとせの春の

宿しめて風にしられぬ花をこそ見ぬ」と詠んだ本居宣長は死後の居所である自分の墓に桜を植えて永久に花を楽しもうというほどの桜好きであった。因みに宣長は墓所の図を書き何処にどんな桜を植えるかまでくわしく記したものを残している。

現在残されている膨大な和歌の中から桜の歌をよりだして眺めてみると、さまざまな表現の中にも特に際立っているのは次の三つの美を詠んだものである。(今仮に三つとしたがまたかわるかもしれない。) 1 盛りの美 2 滅びの美 3 魔性の美。まず日ごと夜ごとに花見に群れる人々は、例外はあるとしても桜の美しさに歓喜しところを奪われてそれを一首にまとめている。もとより感じ方に深い浅いはあるとしてもともかく桜に圧倒されているのである。これは盛りの美としてとらえたものである。次ぎに花十日とも七日ともいわれるほど花の咲く時が短く、咲いたと思ったら早散りはじめる桜にはかなさを感じそれを無常と意識するのも古来多くみられるものである。昔から今に至るまで僧も俗も世の無常を嘆くのが人生の常になってしまい、それを象徴するものとして桜ほどぴったりした花はなかったのである。桜に見るほろびの美は正にそれをあらわしている。しかし桜は盛りの美しさで人々の心を豊かにし、散るさまのはかなさで人々を沈潜させる以外に花のもついいようもない妖しさでも人の心を疼かせる魅力をもっているように思う。桜の木の下には死体が埋められているからあのように花が美しいのだといったのは梶井基次郎だが、梶井にいわせない

までも、たしかにあの花には人を恐れさせるほどのなにかが潜んでいる。吸い込まれてしまいそうな危うさ、寄り付けないような怖さ、神秘的ともいえる力を感じる。これを私は魔性の美と呼ぶ。これらのいずれに魅かれるかはそれぞれの桜への態度をあらわしている。また、たかが桜くんだりになんな大袈裟など笑うのもご自由だし、桜なんて大嫌いこれみよがしでと嫌悪の情をあらわす人も多いことと思う。しかし私自身は桜のすべてに魅せられる一方で、この魔性に究極的なものを感じる。それは日本人に見られる一種の宗教的情緒に通じるものを内包していると思う。

桜が日本人の心の中にもっている意味は何なんだろう。桜が咲くと、我も我もと花見に出かけるのは、新年に初詣でに行く心理に似ている。集団心理、日本人独特の意識と行動といえるかもしれないが、それなら桜でなくてもいいはずである。しかし、桜が咲くと人々は出かける。桜はダシにつかわれているのか。そうではないだろう。やはり桜を見たいのである。桜でなければだめなのである。そして「花狂い」の私は桜についてこの心性を何とかまとめたいのである。

「桜」研究のための資料集めの仕事はいつ切りがつくのか。古代から幕末までと一応限って見たが、今や中世末ごろまでの桜の歌と文を終わっただけである。これらをどう料理するか、どう意味づけるかなど、限りなく大きい問題を抱えて頭痛鉢巻きしながら、また間もなくはじまる桜の季節を心待ちしている。